はしがき

本書は、東アジアの安全保障環境について、2000年1月から12月までの1年間の動向を記述の対象にしている。2000年の東アジアは、平和と安定の観点からは、比較的穏やかなうちに推移したといえる。この地域は多くの不安定要因を抱えつつ、大きな変化の過程にある。その中で、冷戦の遺産である朝鮮半島の分断について、南北間で平和共存を模索する動きが始まった。これは、新しい世紀を迎えた東アジアの平和と安定にとって、1つの明るい兆候である。

こうした動きに配慮しつつ、日本を取り巻く国際環境が真に安定の方向へ向かっているのかを見極めることは、この地域に平和を形作る上で、何よりも重要なことである。『東アジア戦略概観2001』はこうした立場から、東アジア地域の戦略環境を分析したものである。

防衛研究所は、防衛庁のシンクタンクとして国際安全保障および戦史について研究するとともに、諸外国の国防大学に相当する教育を行っている。また、20カ国が参加するアジア太平洋諸国安全保障セミナーを主催するとともに、防衛研究交流などを通じて、我が国の隣国である中国、ロシア、韓国およびASEAN諸国などと安全保障対話を推進している。それは、地域の安全保障についてさまざまな視点から議論し、意見を交換することによってこそ、各国間の誤解を減らし信頼を高めることが可能であるという考え方に基いている。防衛研究所は、『防衛研究所紀要』やホームページ(<http://www.nids.go.jp>)を通じて、広く情報発信を行っており、本書『東アジア戦略概観』もその一環として出版されている。

本書の分析対象は、これまでの朝鮮半島、中国、ロシアの地域情勢と、米国の東アジア政策に加えて、今年版では日本の章を設けた。また、東アジアの戦略環境に影響を与えるものとして、南北首脳会談、米国の国家ミサイル防衛(NMD)構想、ASEAN、情報RMA(軍事における革命)をトピックスとして取り上げ、分析を試みた。『東アジア戦略概観』は本書で5冊目を数える。本書が読者にとって東アジアの戦略環境を理解する一助となることを希望し、議論を喚起するものとなることを期待している。

本書は防衛研究所の編集・執筆グループが研究者の立場から執筆したものであり、政府および防衛庁の見解を示すものではない。各章の中心的な執筆担当者は、道下徳成(第1章、第5章)、小川伸一(第2章)、飯田将史(第3章)、高橋杉雄(第4章)、間山克彦(第6章)、川勝千可子(同)、斎藤勉(同)、坂口賀朗(第7章)、菊地茂雄(同)、佐藤丙午(第8章)、上野英詞(第9章)、石田敏晴(同)である。また、編集は、吉崎知典、川勝千可子、飯田将史、湯浅剛が担当した。

平成13年(2001年)2月

防衛研究所 編集長・第1研究部長 近藤重克